

pon kanpi-sos  
ポン カンピソシ



9

アイヌ文化紹介小冊子

地名



## 本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連が定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995(平成7)年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目「話す」で言葉を、2冊目「着る」、3冊目「食べる」、4冊目「住まい」で衣・食・住を、5冊目「祈る」で信仰を、6冊目「口頭文芸」、7冊目「芸能」では口頭で伝承されてきた物語や、歌と踊りを、8冊目「民具」では伝統的な暮らしの中の生活用具などについて、それぞれ紹介してきました。

この9冊目では、地名について取り上げました。北海道の地名は、その多くがアイヌ語に由来するものです。この冊子では、このようなアイヌ語地名のあらましについて、いろいろな例を挙げながら説明しています。また、アイヌ語地名について学んだり、調べたりするための資料なども紹介しています。

ボン カンピ ソシ  
pon kanpi - sos 小冊子  
小さい 紙 束

## 目次

[ 1 ] アイヌ語地名とは	2
1 北海道の地名とアイヌ語地名	2
2 アイヌ語地名の伝わり方	4
[ 2 ] いろいろなアイヌ語地名	11
1 地形などを表す地名	12
2 動物や植物に関係する地名	16
3 人々の暮らしに関わる地名	21
[ 3 ] アイヌ語地名について学ぶために	29

この小冊子での市町村名の記述は、すべて平成15年度までの市町村に基づいています。

# [ 1 ] アイヌ語地名とは

## 1 北海道の地名とアイヌ語地名

人が暮らしてきたところには、その土地で暮らした人が呼びならわしてきた川の名や道の名、町や集落の名など、様々な地名があります。現在の北海道にもたくさんの地名があります。その多くは、アイヌ語に由来するものです。

例えば、北海道には「<sup>のほりべつ</sup>登別」や「<sup>わっかない</sup>稚内」のように「ベツ」や「ナイ」の付く地名があちこちに見られることはよく知られています。これらはいずれも、アイヌ語で川や沢を意味する「ベツ」や「ナイ」に関係する地名です（ 13ページ）。アイヌの人たちの伝統的な暮らしの中では、川は交通路としても食料などを得る場所としても大切な存在だったことから、川の様子や特徴、暮らしとの関わりなどを表す地名が多く残っていると考えられています。

このように、アイヌ語の地名は、何らかの必要に応じて付けられたものであり、当時の人たちの暮らしが反映されているものです。

### Place Names in Hokkaido and Place Names Derived from the Ainu Language

In the places where humans have resided, a variety of names are used indicating the rivers, roads, towns and small communities. The place names have been given by the local residents and most of these names in Hokkaido derive from the Ainu language.

As can be seen, place names with "-betsu" or "-nai", for instance, as in Noboribetsu and Wakkanai, are often found in various locations in Hokkaido. These names are related to the Ainu words *pet* and *nay* meaning "river" and "stream". Rivers were most essential to the traditional lives of Ainu people as a means of transportation and a source of food. Therefore, today many place names such as the above exist indicating geographic features related to rivers and the way the places were related to the lives of the Ainu.

Places were named in accordance with certain needs of Ainu people, thus reflecting the traditional Ainu way of life.

アイヌ語に基づく地名があちこちに多く見られるのは、その土地に昔からアイヌ語を話す人々が暮らしてきたことあかしの何よりの証でもあります。

北海道でアイヌ語以外に由来する地名には、次のような例があります。

本州などから北海道に移住してきた人たちが故郷の地名などを付けたもの

鳥取とっとり（釧路市くしろ）：鳥取県から移住してきた人々が多いことから村の名として付けられ、現在も釧路市内の町名となっています。

仁木にき（仁木町）：明治時代にこの土地に移住した仁木竹吉たけよしという人の名前にちなんで命名され、現在も町の名となっているものです。

地名の改正や住宅地の開発に伴って新たに付けられたもの

千歳ちとせ（千歳市）：千歳市の中心付近がもともと「シコツ」と呼ばれていたのを江戸時代に改名し、それが現在の市の名になっているものです。

\*シコツは、「大きな・河谷」の意であると考えられています。昔の記録には「シコツ」などと書かれています。



写真1 『元禄国絵図』(1700年)の一部：  
今の千歳付近には「志こつ」(シコツ)と記されています。

The fact that place names derived from the Ainu language are found in great number is evidence that people who spoke the Ainu language inhabited the area from early times.

## 2 アイヌ語地名の伝わり方

アイヌ語で呼ばれてきた地名は、カタカナやひらがな、漢字などで表され、記録されてきました（8ページ参照）。それらの中には、今日までの間に、音や形が変わってしまったものが多く見られます。

アイヌ語の呼び名に漢字をあてたりすることで発音が変わったり、地名の呼び名が漢字の読み方に引かれて変わったりする例がよく見られます。

例 ▶ <sup>むろらん</sup>室蘭（室蘭市）：古い資料には「モルラン」あるいは「モロラン」と記されていますが、「室蘭」という漢字があてられ、呼び名も「むろらん」となりました。

<sup>しゅえん</sup> <sup>しゅり</sup>朱円（斜里町）：かつては「しゅまとかり」（近くを流れる川がスマ・トゥカリ・ベツと呼ばれていたことに由来すると考えられます）と呼ばれていましたが、「朱円」という漢字があてられ、後に呼び名は「しゅえん」となりました。



写真2 まつうらたけしろう どうざいえぞさんせんちりとりしらすべす  
松浦武四郎「東西蝦夷山川地理取調図」  
（1859年）に描かれた室蘭付近



写真3 1897(明治30)年製版の地形図「朱円」  
(縮尺5万分の1、陸地測量部発行)の  
一部：「朱圓」(朱円)のところに小さく  
「シユマトカリ」とルビが付けられて  
います。

---

同じ意味のアイヌ語でも、漢字をあてはめるときに異なる字をあてている場合も多く見られます。

例 <sup>きなおし</sup>木直 ( <sup>みなみ</sup>南 <sup>がやべ</sup>茅部町 ) と <sup>きねうす</sup>杵臼 ( <sup>うらかわ</sup>浦河町 ) : どちらもキナ・ウシ ( ガマなどの草が生えているところ ) という地名 ( 19 ~ 20 ページ ) に基づくと考えられています。

<sup>るべしべ</sup>留辺蘂 ( 留辺蘂町 ) と <sup>るべしべ</sup>累標 ( <sup>ほべつ</sup>穂別町 <sup>いずみ</sup>和泉 ) : どちらもルベシベ ( ル・ベシ・ペ = 道が・それに沿って下る・もの ) という、沢沿いに峠を越えることのできるような交通路を指した地名 ( 21 ~ 23 ページ ) に基づくと考えられています。



写真4 ガマ

#### Transmission of Place Names Derived from the Ainu Language

Place names originally pronounced according to the Ainu language's pronunciation came to be written and documented using Japanese katakana, hiragana and kanji characters. (see page 8)

During the course of transmission, these names have often become detached from the original pronunciation and meaning.

Among areas in Hokkaido, different kanji characters were chosen for the same Ainu word used for describing a geographical feature as long as the characters were phonetically applicable.

地名がもとの場所から移動した例もあります。

例 ▶ <sup>むろらん</sup>室蘭（室蘭市：4ページ参照）：もとは現在の室蘭市<sup>さきもり</sup>崎守町付近を指す地名でしたが、明治になって現在の室蘭駅からその北側にかけて港と市街地がつくられ、やがてこちらが「室蘭」となったものです。

<sup>おたる</sup>小樽（小樽市）：もとはヲタルナイ（小樽内）川の河口付近の地名だったものが、江戸時代に漁業などのためにこの地域のアイヌの人々を現在の小樽市街に移したときに地名もそのまま移して「小樽内」と呼び、やがて「小樽」となったものです。

上の例では、どちらも昔は狭い範囲に付けられていた地名が、現在では市の名前になっています。このように、かつては限られた場所を指していた地名が、次第に広い範囲を指すようになった例も多く見られます。

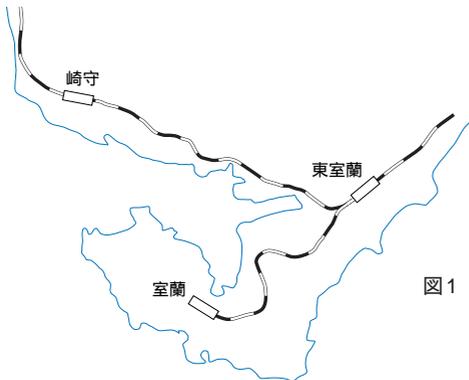


図1 現在の室蘭付近  
4ページ写真2の図で「モロラン」と記された場所は、現在の崎守駅の辺りになります。

In some cases, a place name that originally described a specific area had evolved to be used to indicate either a different or a broader area.

---

このように、現在の地名は、その多くが、いろいろな経緯をたどってかつてのアイヌ語の呼び名から移り変わっています。現在では地形が変わってしまったところもあり、その地名がどの場所を指すのかがわからなくなったり、あるいは地名そのものが忘れられたり失われたりして、昔その地名が指し示していた意味を実際に確認することが難しくなっています。

この小冊子で紹介している地名も、多くは、もともとのその場所などをはっきりと確認できなくなっています。

時代の移り変わりによる社会や暮らしの変化に伴って、地名もまた変わっていくことは各地で見られます。ただ、特に北海道のアイヌ語地名の場合は、明治時代以降に本州などからの移民が急激に増えたことなどが大きな影響を与えたと考えられます。

いっぽうで、近年では、アイヌ文化や郷土の歴史に対する関心が高まる中で、アイヌ語の地名についても、地名の由来を学習したり、実際に現地を見学したりする催しが開かれるなどの動きも起きています。

Current place names have mostly undergone various changes and developed into those that are different from the original Ainu language designations. Due to changes in the geographic features and landscape as well as people's lifestyles, it is difficult to specify the place that the name formerly indicated and some place names have been lost as well. Today, it is increasingly difficult to actually confirm the original meaning of a place name people used in past times.

Along with the changes in society and lifestyles over time, place names have changed as well in some areas. Characteristic of changes in Hokkaido place names derived from the Ainu language is the enormous effect upon them caused by the drastic increase in the number of immigrants from the main island of Honshu beginning in the Meiji era.

On the other hand, amid the increased interest in Ainu culture and local history in recent years, there has been a variety of activities where the public can learn about the origin of place names related to the Ainu language and take field trips.

## アイヌ語地名の記録と研究の歴史

3ページに掲載した地図は、1700（元禄13）年に松前藩が作成したとされ、現代に伝わる北海道の地図としてはもっとも古いものに属します。この頃の地図や文献に記録されている地名は海岸部が中心で、その数も多くはなく、伝聞などによる不正確な記述も少なからず見られます。

しかしやがて内陸部の地名も記録されるようになり、<sup>まつうらたけ しろう</sup>松浦武四郎（1818～1888年）のように、各地でアイヌの人たちから聞き取りを行いながら、多くの地名を書き込んだ地図を作ったり、地名の意味や由来などを記録したりする人も現れました。



写真5 <sup>はたのあわきまろ ひがしえぞちめいこう</sup>秦檣麻呂『東蝦夷地名考』（1808年）  
アイヌ語地名の解釈を記した文献として  
はもっとも古いものとされています。



写真6 松浦武四郎「東西蝦夷山川地理取調図」  
羽幌付近を描いた部分の、表紙と図の一部です。

明治時代以降には、より詳しい地名の調査や、アイヌ語研究の知識に基づく地名の研究が行われるようになりました。

永田方正（1838～1911年）は、全道を廻って多くのアイヌ語地名を調べ、『北海道蝦夷語地名解』（初版1891年）という本を著しました。

日本のアイヌ語研究の基礎を築いたとされる金田一京助（1882～1971年）やその研究を引き継いだ知里真志保（1909～1961年）らは、言語学の立場から地名研究を進めました。特に知里真志保は、当時既に多く見られた科学的な知識に基づくものとは言えない地名研究の風潮を、厳しく批判しています。

山田秀三（1899～1992年）は、東北の地名に対する関心からアイヌ語地名の調査を進め、金田一・知里らの成果に学びつつ、アイヌ語地名の研究の水準を大きく高めるとともに、北海道や東北の地名に関する多くの業績を遺しました。先ず古い地図や文献をよく調べ、それに基づき実際に現地を訪ねて地形などを確認するという方法や、似た名前の地名を数多く調べてそれらの結果を重ね合わせながら考えを進めていくという研究の手順は、山田秀三によって確立されたものです。

この小冊子でも、本文の内容の多くは、山田秀三による『北海道の地名』『アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集』（29、31ページ）などの記述をもとにしています。



写真7  
永田方正『北海道蝦夷語地名解』（初版の複製版）



写真8  
知里真志保『地名アイヌ語小辞典』（30ページ）



写真9  
山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』（31ページ）

## アイヌ語地名の分布

北海道には各地にアイヌ語地名があることが知られていますが、サハリン（樺太）や千島（クリル）列島にも、同じような地名があることが確認されています。

本州でも、津軽海峡を挟んで、おおよそ宮城県北部から山形県・秋田県の境あたりまでは、アイヌ語地名と確認できるものが比較的多く存在することが知られています。

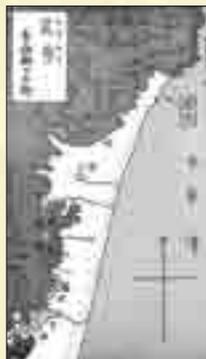


写真10 静狩

図2 おしゃまんべ しづかり ひがしどおり しづかり  
長万部町「静狩」と青森県東通村「尻笥」(山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』): どちらも、「シリ・トゥカリ=山・の手前」という、比較的長く続いた浜が急に大きな山(断崖)に突き当たる辺りの地名を指すと考えられています。



### Distribution of Place Names Derived from the Ainu Language

It is a well-known fact that place names related to the Ainu language exist in various parts of Hokkaido, and place names similar to these also have been confirmed in Sakhalin and the Kuriles. Place names whose Ainu origin has been confirmed through academic research are distributed in the area of Honshu Island beyond the Tsugaru Strait. More of these place names are found in areas of Japan extending from Hokkaido down to the northern part of Miyagi Prefecture, near the border between Yamagata and Akita Prefectures, compared with areas of Japan to the south of that northern Miyagi border region.

## [2] いろいろなアイヌ語地名

これまで見てきたように、アイヌ語の地名には、地形の様子を表したものや、その土地の人々の暮らしと関わって名づけられたものなど、いろいろな場合が見られます。ここでは、そうしたアイヌ語地名について、いくつかの例を挙げて紹介します。

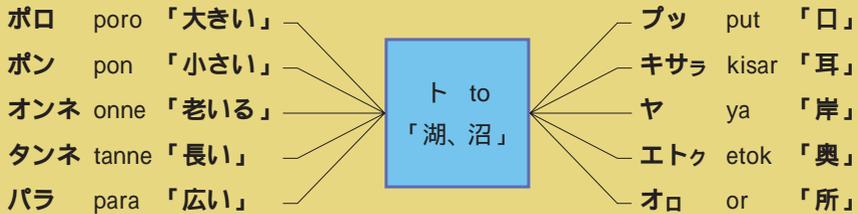
A Variety of Place Names Derived from the Ainu Language

As has been stated, place names of Ainu origin indicate various things including geographic features and landscape or the way the place had related to the lives of Ainu people.

## 1 地形などを表す地名

川や湖、崖や岬、海岸などの地形を表す言葉に、その性質やありさまを示す言葉が付いて、実際の地形の様子やそこに暮らす人々からみた特徴などを表したと思われる地名が数多く見られます。

例えば、湖や沼などを意味する「ト」という言葉に、次のようにいろいろな言葉が付いた地名が見られます。



パラ・ト para-to 「広い・湖」

茨戸 ばらと (札幌市)

トー・ヤ to-ya 「湖・岸」

洞爺 とうや (洞爺村)

トー・ブツ to-put 「湖・口」(トー・プトウ to-putu 「湖の口」)

涛沸 とうふつ (網走市)

十弗 とうふつ (豊頃町)

Many names primarily show the geographic features of a river, lake, cliff, cape or sea coast, and they are combined with a word that describes details. These place names thus indicate actual geography and specific characteristics as viewed by local people related to the respective places.

「川」や「沢」を意味する「ペツ」や「ナイ」の付く地名には、次のような例が見られます。

例 ▶ <sup>ほんべつ</sup>本別（<sup>しかべ</sup>本別町、鹿部町など）：「ポン・ペツ 小さい・川」に由来すると考えられています。

<sup>きつない</sup>札内（<sup>まくべつ</sup>幕別町）：「サツ・ナイ 乾いている・川」に由来すると考えられています。ふだんは水が流れていても、雨の少ない季節になると地面に水が吸い込まれてしまって乾いて見える川を表す場合が多いようです。

<sup>ないがち</sup>内淵（<sup>なよろ</sup>名寄市）：「ナイ・ブツ川・口」に由来すると考えられています。川の合流地点などを表す場合が多いようです。

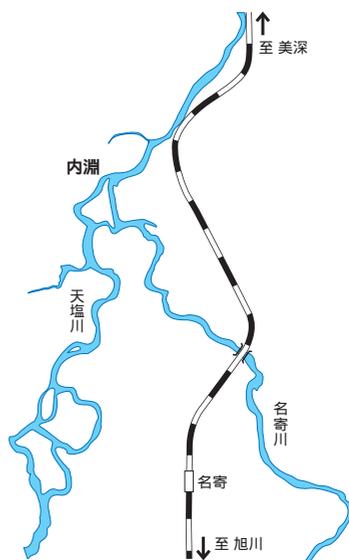


図3 内淵付近(大正時代の地形図をもとに作成)  
内淵は、天塩川に名寄川などが合流する地点の近くにあたります。

The place name, "Honbetsu" as in Honbetsu and Shikabe Towns, appears to be derived from the two Ainu words *pon* (small) and *pet* (river) linked together.

その他、<sup>がけ</sup>崖、海岸、滝などの地形に関わる地名には、次のようなものがあります。

## 崖

例▶<sup>ひらぎし</sup>平岸（札幌市、芦別市）：「ピラ・ケッ 崖・(の)端」に由来すると考えられています。

<sup>ひらか</sup>平賀（門別町）：「ピラ・カ 崖・(の)上」に由来すると考えられています。

図4 平賀付近（山田秀三『北海道のアイヌ地名十二話』をもとに作成）

今の平賀の集落は平地にありますが、以前は、沙流川を挟んで東側の崖の上にあります。集落の移転に伴って地名も移動したものです。



## 砂浜

例▶<sup>うたすつ すつつ</sup>歌葉（寿都町）：「オタ・スツ 砂浜・(の)根もと」に由来すると考えられています。オタスツとは、砂浜が海沿いに広がって、その端で磯浜や石浜に変わる手前の辺りを指すとされています。

オタモイ（<sup>おたる</sup>小樽市）：「オタ・モイ 砂浜・(の)入り江」に由来すると考えられています。

"Otamoi" in Otaru is deemed to have originated from the combination of the two Ainu words *ota* (a sandy beach) and *moy* (a small bay).

## 滝

例▶<sup>そうらんべつ かみかわ</sup>層雲別（上川町）：「ソ・ウン・ベツ 滝・ある・川」に由来するとされています。

<sup>しよこつ たきのうえ もんべつ</sup>渚滑川（滝上町～紋別市）：川の名は「ソ・コツ 滝・くぼみ（滝壺）」に由来するとされています。現在の滝上町の市街地のやや下流部に滝のような急流と淵が見られます。

## その他

例▶<sup>はったり きょうわ</sup>発足（共和町）：「ハッタラ 淵」があったことに由来するとされています。

<sup>えんがる</sup>遠軽（遠軽町）：「インカラ・ウシ・イ 眺める・いつもする・ところ」に由来するとされています。この呼び名は、その上から周囲や遠くを望むことができるような山や崖を指すとされ、ここでは、町の市街地のすぐ傍らにそびえる<sup>がんぼう</sup>瞰望岩がそれにあたります。



写真11 遠軽の瞰望岩

---

## 2 動物や植物に関係する地名

その土地に棲んでいる動物や生えている植物などに関係する地名も多く見られます。たいていは、それらの動物や植物がその近辺に暮らす人々にとって食糧や生活の資源になっていることが多いようです。

動物に関する地名では、次のような例が見られます。

例 いくとら みなみふらの 幾寅（南富良野町）：近くを流れるユクトラシュベツ川（ユク・トゥラシ・ベツ シカ・登る・川 という意味だと考えられています）に由来するとされています。

いそぶんない しべちゃ 磯分内（標茶町）：「イソボ・ウン・ナイ ウサギ・いる・沢」に由来すると考えられています。



写真12 エゾシカ

---

例 近文（旭川市）：近くちかづみの山あさひかわにチカプニ（チカナ・ウン・イ 鳥・いる・ところ という意味だと考えられています）と呼ばれる大岩があることに由来するとされています。

例 トカラモイ（羅臼町）：今は昆布浜と呼ばれているところの昔の呼び名です。「トゥカラ・モイ アザラシ・(の)入江」に由来すると考えられています。



写真13 ゴマフアザラシ

Many place names are related to the animals and plants in the area, in which case those animals and plants were important sources of food and other basic needs of living. "Isobun'nai" in Shibeche Town, is likely derived from the three Ainu words *isopo* (rabbit), *un* (being) and *nay* (stream) combined with one another.

例▶ <sup>ちらいおつ つきがた</sup>知来乙（月形町）：「チライ・オツ イトウ・たくさんいる 」に由来するとされています。

<sup>いちゃん ふかがわ</sup>一己（深川市）：「イチャン サケの産卵場 」に由来するとされています。

<sup>びばうし びえい</sup>美馬牛（美瑛町）：「ピバ・ウシ・イ カワシンジュガイ・多くいる・もの（川）」に由来すると考えられています。



写真14 産卵のため川を上ってきたサケ



写真15・図5 カワシンジュガイの殻を使った、穂を摘み取る道具

\*カワシンジュガイは、カラス貝、沼貝等とも呼ばれます。

植物に関する地名では、次のような例が見られます。

例 ▶ 去場（平取町）：「サラ・パ 麓原・（の）上手」に由来すると考えられています。

鬼斗牛（旭川市）：「キト・ウシ・イ ギョウジャンニク・多い・ところ」に由来すると考えられています。



写真16 ギョウジャンニク

例 ▶ 蘭越（千歳市）、根志越（千歳市）：それぞれ、「ランコ・ウシ カツラの木・群生する」、「ネシコ・ウシ クルミの木・群生する」に由来するとされています。

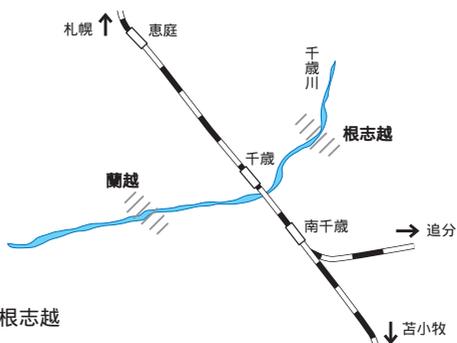


図6 蘭越と根志越

例▶<sup>たどし</sup>多度志（深川市）：「<sup>カガ</sup>タツ・ウシ・ナイ 樺・群生する・川」に由来すると考えられています。

写真17 白樺の木と樺皮を使った民具



白樺の木



樺の皮



樺皮を使った<sup>とうしやく</sup>灯燭  
(千歳：これに火をつけてたいまつにします)



樺皮の容器(千歳)

### 3 人々の暮らしに関わる地名

交通路、狩猟や採集、信仰や儀式など、生活の中の様々な営みに関係する地名があります。

#### 交通路などに関する地名

5ページで紹介した「<sup>るべしべ</sup>留辺蘂」「<sup>るべしべ</sup>累標」も峠を越える交通路の例です。同じような地名は各地で見られます。



図7 道内各地の「ルベシベ」と付いた地名の例

Some place names are related to the various activities people had carried out in leading their lives, representing transportation roads, hunting and gathering activities and religion and rituals.

The place name "Rubeshibe" appears to be based on the combination of three Ainu words; *ru* (road), *pes* (descend along with) and *pe* (unspecified object). In this context, the name seems to indicate a road that people take to cross a mountain pass and which runs alongside a small river.

昔の暮らしでは、同じ目的地に向かうときでも、夏場と雪の降る季節とでは通り道を変えることがあったと言われています。

例えば咲来（音威子府村）は「サク・ル 夏（の）・道」、又留内（稚内市）は「マタ・ル 冬（の）・道」に由来すると考えられています。



図8 咲来付近

「バンケ」「ベンケ」とは、この場合、それぞれ「川下の」「川上の」という意味で用いられています。現在の咲来峠を越える道も、天塩川流域と歌登町やオホーツク海側とを結んでいます。

この他にも、交通路や交通の手段などに関する地名として、次のような例があります。

例 ▶ 伊香牛<sup>いかうし</sup>（当麻町<sup>とうま</sup>）：「イ・イカ・ウシ・イ それ・（を）越える・いつもする・ところ」で、川（現在の石狩川上流）を越えて渡る地点であったことに由来するのではないかと考えられています。

チブタウシナイ<sup>いまかね</sup>（今金町）：「チブ・タ・ウシ・ナイ 舟・（を）彫る・いつもする・沢」に由来するとされています。かつて川筋を行き来するときの主な交通手段は、丸木舟でした。ここはそれを造るのに適した木の多い川筋であったためではないかと考えられています。



写真18 アイヌ民族博物館（白老町<sup>しらおい</sup>）における丸木舟の製作



湖に浮かべられた丸木舟

## 狩猟や採集に関する地名

16～20ページで動物や植物に関する地名を紹介しましたが、そうした動植物の狩猟や採集に関する地名も多く見られます。

例▶<sup>くほない</sup>久保内（<sup>そうべつ</sup>壮瞥町）：「ク・オ・ナイ 仕掛け弓・多くある・沢」に由来する  
と考えられています。



写真19 仕掛け弓



写真20 弓と矢

例 ▶ 浦士別（網走市）：「ウライ・ウシ・ペッ 築・ある・川」に由来すると考えられています。

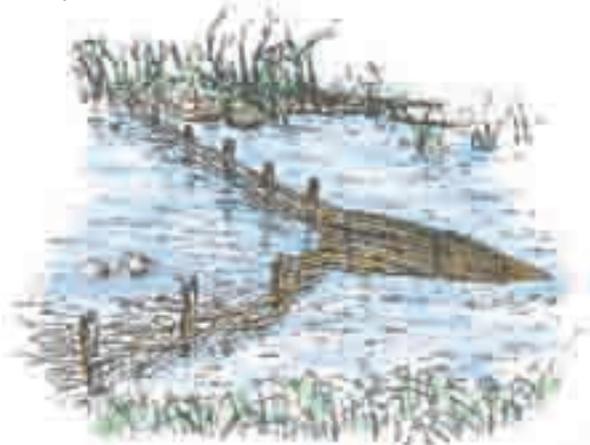


図9 築（川を上ってきた魚が、中央のカゴの中に入り込むしくみになっています）

例 ▶ シュルクタウシベツ川（士別市）：「スルク・タ・ウシ・ペッ トリカブトの根・（を）掘る・いつもする・川」に由来すると考えられています。  
トリカブトの根は、狩猟に使う矢に塗る毒に使いました。



写真21 トリカブト

---

例 ▶ <sup>あっかるうすない</sup>厚 <sup>つきがた</sup>軽白内 (月形町) : 「アツ・カラ・ウシ・ナイ オヒヨウの樹皮・(を)と  
る・いつもする・沢」に由来するとされています。



写真22 オヒヨウの木肌



写真23 オヒヨウの樹皮の繊維を編んだ布



写真24 オヒヨウの樹皮衣 (サハリンのものです)

## 信仰や儀式に関する地名

儀式を行う場所や信仰にちなんだ地名なども各地に見られます。

例 ▶ <sup>ちのみ</sup>乳呑（<sup>うらかわ</sup>浦河町）：ここにある海辺に突き出た丘が「チ・ノミ・シリ 我ら・祈る・山」と呼ばれていたことに由来すると考えられています。かつてこの地域の人々はその丘の上に集まって祈りごとをしていたところだとされています。

<sup>ぬさまい</sup>幣舞（<sup>くしろ</sup>釧路市）：「ヌサ・オマ・イ <sup>さいだん</sup>祭壇・ある・ところ」に由来すると考えられています。



写真25 祭壇で祈るようす（白老町：大正時代の頃に撮影されたものです）

## アイヌ語地名の研究について

アイヌ語地名は、アイヌの人々の言葉、歴史、文化を伝える身近な存在として関心を寄せられることも多いようです。しかし現在では、もともとの地名の呼び方や指し示した場所、その意味や由来を確かめることが難しいところが多くなっています（7ページ）。

また、例えば12ページの「ト（湖、沼）」の付く地名の例に見られるように、アイヌ語地名の付けられ方には一定のパターンや決まりごとがはたらいっていることがうかがえます。従って、アイヌ語地名についてより深く調べていくためには、アイヌ語の単語の発音や意味に関する知識だけではなく、文法（単語のなりたちに関するしくみ）や、単語を続けて発音するときの音の変化のしかたなどに関する知識を持っておくことが必要になります。

このほか、例えば、前ページで紹介した「チノミシリ」は、言葉の意味の解釈から「我ら・祈る・山」というところまでをつかむことができます。しかし、実際の地名には、その山が祈りの対象になっている場合もあれば、その山で祈りごとを行っていた場合などもあることが知られているので、その場所がどれにあたるのかについては、さらにその土地の伝承や記録なども調べてみなければなりません。

アイヌ語地名の調査や研究は、言葉の意味やアイヌ語の文法をつかんでおくことはもちろん、その土地の地形や伝承、昔の記録や似たような地名の比較などの様々な要素を厳密に調べて重ね合わせていくことによって、はじめて広がりをもって進めていくことのできるものだと言えます。

# [ 3 ] アイヌ語地名について学ぶために

アイヌ語地名を含む北海道の地名について調べることのできる文献や、アイヌ語地名を知るための概説書、専門書などを紹介します。

一般の書店で現在も販売されているものには、価格を記しました。

## ① 北海道の地名に関する辞典

山田秀三『北海道の地名 アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集別巻』草風館 2000年 6,000円（税別）

アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏が、自身の研究に基づき、北海道の主な地名についてまとめた本です。過去の記録や文献についても広く取り上げ、それらの出典についても明記されています。

『角川日本地名大辞典 1 北海道』角川書店 1987年

上・下の2巻組です。上巻では北海道の地名約15,000項目を50音順に説明し、下巻では市町村ごとに主な地名など約7,000項目について説明しています。

『日本歴史地名大系 1 北海道の地名』平凡社 2003年 34,000円（税別）

昔の地名に関する解説に重点を置いた辞典です。北海道の主な地名など約5,400項目を取り上げているほか、北海道の歴史と地名に関する重要な項目については、特にページを多く使って説明していることが特徴です。



## ② アイヌ語地名の概説書、入門書

北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進室（編）『アイヌ語地名ハンドブック』2001年（増刷 2007年）

アイヌ語地名のあらましを説明したパンフレットです。

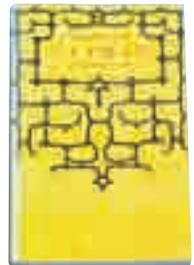
山田秀三『アイヌ語地名を歩く』北海道新聞社 1986年 1,650円（税別）

著者が自身のアイヌ語地名研究の歩みなどを振り返って、その思い出や逸話などを綴ったものです。新聞に掲載したもので、一つ一つの話は短いですが、アイヌ語地名の調べ方や考え方に関する大事な話や興味深い話題がたくさん含まれています。

知里真志保『アイヌ語入門 特に地名研究者のために』復刻：北海道出版企画センター 1985年（初版1956年） 1,214円（税別）

知里真志保『地名アイヌ語小辞典』復刻：北海道出版企画センター 1984年（初版1956年） 971円（税別）

「入門」「小辞典」と題していますが、一般的な意味での初心者向けの入門書というよりは、アイヌ語地名を調べ考えるために大切な問題や基本的な考え方を論じた本と言えます。復刻版には、どちらも山田秀三による簡単な紹介文が付いています。



### ③ アイヌ語地名に関する専門書、資料集

山田秀三『アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集』(全4冊)草風館(新装版)1995年  
各6,000円(税別)

山田秀三の1982年ごろまでの主な著作のほか、新たに書き下ろした論文を全4冊にまとめたもので  
す。著者のアイヌ語地名研究の方法や業績をよく知ることができます。

収録されている主な著作は、次のとおりです。

「東北と北海道のアイヌ語地名考」(初版1957年)

山田秀三による最初の単行本で、北海道と東北のアイヌ語地名を比較検討しています。

「北海道の川の名」(初版1971年)

北海道の主な河川の名前について説明しています。

「札幌のアイヌ地名を尋ねて」(初版1966年)

札幌の主な地名を紹介しています。考え方や調べ方の道筋が比較的詳しく述べられています。

「アイヌ語地名分布の研究」(書き下ろし)

同じような地名や地名に関係する言葉を手がかりに、地名の分布やその特徴を検討しています。

山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』草風館 1993年 6,000円(税別)

主に上記の著作集の初版(1982年)以後の論文や、東北のアイヌ語地名などに関する、著作集未収録の論文などをまとめたものです。

山田秀三『アイヌ語地名の輪郭』草風館 1995年 6,000円(税別)

これ以前の単行本に未収録の著作をまとめたもので、地名研究の方法や著者が長年抱いてきた疑問などについて晩年にまとめた論文なども収録されています。

山田秀三(監修) 佐々木利和(編)『アイヌ語地名  
資料集成』草風館 1988年 24,000円(税別)

北海道の地名に関する解釈を記した文献としては古い時期のものとしてされるはたのあむきまろ 秦 檀 麻呂ひがしゑ 『東蝦夷地名考』(8ページ)をはじめ、松浦武四郎による地図(8ページ)など、江戸時代から戦後までのアイヌ語地名に関する基本的かつ重要な資料や文献をまとめた資料集です。収録された資料に関する解説も付いています。



## その他本書を書くにあたっての参考文献

服部四郎「カラフト西海岸北部地名の共時論的研究」佐々木弘太郎『樺太アイヌ語地名小辞典』

みやま書房 1969年

切替英雄「頻出アイヌ語地名の形態論的構造」『アイヌ語地名研究』3 アイヌ語地名研究会 2000年

児島恭子「アイヌ語地名の世界」『アイヌの歴史と文化』創童舎 2003年

高倉新一郎編著『北海道古地図集成』北海道出版企画センター 1987年

高木崇世芝『北海道の古地図』五稜郭タワー株式会社 2000年

永田方正『北海道蝦夷語地名解』（初版の復刻版）草風館 1984年

## 協力（敬称略）

財団法人アイヌ民族博物館、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、北海道大学附属図書館、  
静内町教育委員会、様似町教育委員会、千歳サケのふるさと館、名寄市北国博物館

## 写真提供、出典等

表紙 (株)さっぽろフォトライブ

写真1、5 北海道大学附属図書館北方資料室

写真3 陸地測量部5万分の1地形図「朱円」(1897年製版)

写真12 (株)さっぽろフォトライブ

写真13 水野文子

写真14 千歳市サケのふるさと館

写真15、17、20、24 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

写真18、25 財団法人アイヌ民族博物館

写真19 秦檀麿『蝦夷島奇観』（影印本、佐々木利和・谷澤尚一研究解説）雄峰社 1982年

写真21 静内町教育委員会

上記以外は当センター所蔵写真

この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。

発行 平成16年2月（2刷 平成20年3月）  
編集 北海道立アイヌ民族文化研究センター  
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER  
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階  
TEL.011-272-8801 FAX.011-272-8850

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/abc>



利尻岳